

二柱の天照大神と饒速日尊

ノアとナオの方舟はしがね 世界統一の神業（中編―二）

出口 恒

地球上の各国家の建設

小亜細亜のアーメニヤ及び

コーカス山、エルサレム、メソポ

タミア及びペルシヤ、印度の一

部は、富土地帯の如く高く雲上

に突出していた。印度の如きも

天竺てんじくと称へられて、其地方での

最高地点であつたが、富士山の

陥没と同時に、此地も亦今の如

く陥落したのである。アーメニ

ヤといふ事は天の意味又は高天

原の意味である「富士山」『靈界

物語』第三十七巻一章）。

地球上の各国家の建設は、古

来に於ける或優秀なる人種の首

長たるものが、高天原即ち天教

山や地教山、アーメニヤ、埃及、

メソポタミア、エルサレム、オノ

コ口島若くは其の首都等に於て、

その子孫並に従属者の中より特

に俊逸なるものを選抜して完全

なる遠征的の冒険隊を組織し、

以てその国土万物を開発経営し

たものなることは、神示の『靈界

物語』に由つて見るも明白なる

事実であります……。

結局高天原人種即ち天津神族

に全く吸収せられ血化けつかせられて

高加索民族なるものが現はれた

り、又大和民族なる君民同祖の

一血族一家的の団体に成つたの

もあります（『序文』『靈界物語』

四十一巻一章）。

ここに天教山（一名須弥仙山

ともいふ）に鎮まり坐す木花姫

命の招きにより、集つた神人は、

大八洲彦命（一名月照彦神）、大

足彦（一名足真彦）、言靈別命一

名少彦名神すくなひなのかみ、神国別命 一名弘

子彦神やすひこ）、国直姫命（一名国照姫

神）、大道別（一名日の出神）、磐

樟彦（一名磐戸別神）、齋代彦 一

名祝部神はふりべのかみ）、大島別（一名太田

神）、鬼武彦（一名大江神）、高倉

旭の二神合体して月日明神その

他の神人なりける。（ノアの洪水

の起る前）それらの神人は、天

教山の中腹青木ヶ原の聖場に会

し、野立彦命の神勅を奉じ、天下

の神人を覚醒すべく、予言者と

なりて世界の各地に派遣せられ

た。その予言の言葉にいふ。「三

千世界一度に開く梅の花、月日

と土の恩を知れ、心一つの救い

の神ぞ、天教山に現はれる」

以上の諸神人はこの神言を唱

へつつ、あるいは童謡に、あるいは

は演芸に、あるいは音楽にこと

よせ、千辛万苦して窃ひそかに国祖の

予言警告を宣伝した（『宣伝使』

『靈界物語』五巻十八章）。ここに

集まつた神人たちが、完全なる

遠征的の冒険隊なのでしようか。

ある優秀な人種とは誰か

我天孫民族は世界の経緯を行い、

天下を太平に治むべき、重大なる

使命を帯びている、附録大祝祝詞

解『靈界物語』三十九巻一章）。

日本は世界一切の中核である。

文芸・宗教・教育・其他あらゆる

ものの枢府である。熱帯に枕し、

寒帯に脚を延ばし、あらゆる気

候、あらゆる土質・風土の凝集地

である。即ち世界一切の小縮写

である。世界の典型である。否、

世界万邦の中つ国として、万国

統治の中府である。靈域である。

ここで聖師は、「我天孫民族は世界の経緯を行い」と、地球上の各国家の建設、国土万物を開発経営したものが、天孫民族 天津神族、高天原人種、日本人であることを示されています。

豊葦原瑞穂国中津国とは

『霊界物語』五卷二十二章「神示の方舟」の中で、方舟がメソポタミア（顕恩郷）を船出しましたが、メソポタミア・顕恩郷の南部にはバビロニアがあり、バビロニアの南半分がシュメールの地域。シュメールはラテン語で

SUMERU・スメル。シュメールの地を含む顕恩郷の神々は『霊界物語』では橙園郷の住民を吸収し、人々は瑞霊にちなむ三三三艘の神示の方舟に乗ってヒマラヤ山（後の地教山）を目指します。



初期シュメール人の粘土板

楔形文字で残された記録では、シュメール人たちは自分達のことを「黒い頭の人々」(saar-giir-ga)と呼び、その土地を「キ・エン・ギル葦の主の地」としていました。それは、そのまま「葦原の中津国」であり、『霊界物語』がメソポタミアを豊葦原瑞穂国中津国としているのと一致。顕恩郷とは、メソポタミアの中で特にシュメールの地を示しているのでしょうか。

メソポタミア……メソはメソ（瑞）という意味、IAは国を表

す接尾辞ですから、メソポタミアは日本語で解釈すると、^{メソポタミア}瑞穂民国。小日本が大日本、世界全体）の中でメソポタミアに相似しています。瑞穂国とは水豊かな米・または麦の灌漑農業の国を示します。シュメール人は

ポタミアはその首都の名を冠して、バビロン帝国の名で知られています。

シュメールと日本は相似形

シュメール人がメソポタミアの土地に入ったのがBC五〇〇年頃。シュメール人の言葉は膠着語で、単語と単語がテニオハのような接着語でくっついていきます。シュメールの母音は四音。メソポタミアの遺跡からは、印章と双六が発見され、人々は日本神話の神のように禿ぎをします。相撲が行われ、日本の道祖神と同じ、蟹面の人々のモチーフの塑像が広く見られます。メソポタミアで復元された音楽は日本の雅楽と類似した旋律。世界最古の王朝シュメール王朝の紋章十六菊花紋は、日本皇室の十六菊花紋とほぼ同じ。この菊

花紋は、メソポタミア地域、エジプト、イスラエル、インドあたりで、神や王家の紋として使われました。これは、シュメール人がそれらの地域に菊花紋を伝え文明を広めたことを示唆しています。その菊花は太陽の光を顕すものと考えます。

『旧約聖書』にも現れる大洪水によって無人になった後、再び定住し都市文化にまで高めたのが、シュメール人。シュメール人は高度に発達した美術と建築技術をもっており、神聖不可侵である国王が治めていました。

シュメールは三大宗教の源流
シュメールのウルで生まれたアブラハムの長男イスマエルの末裔はアラブ十二支族を産み、そこからイスラム教の始祖、マホメットが誕生。またアブラハ



シュメールの十六菊花紋と十字架

ムの正妻サライの産んだイサクの末裔がユダヤ十二支族。ダビデ王やソロモン王、イエス・キリストはイサクの末裔。

アブラハムの父テラはBC二〇〇〇年頃ウルに来ており、アブラハムはシュメールのウルに生まれ、その母親も妻もシュメール人であったことから、ユ

ダヤ、キリスト、イスラム、世界三大宗教の源流はシュメールの地で一つに結ばれるのです。ユダヤ人はセム族であり、シュメール人は世界最古の都市文明を築いた民族ですので、セム族ユダヤ人はシュメールの系譜と

いってよいでしょう。
「あのハンは王という意味やで、アブラハムというのも神の王という意味やな。アは天という意味になるのやね、アはアブラムである。総て王者には人間のようには名はつけないのが本当や、大君と云えばそれでいいのや」(「出口王仁三郎氏を囲む座談会」『昭和青年』)。
「完全なる遠征的の冒険隊を組織し、以てその国土万物を開発経営」した『霊界物語』の文脈、豊葦原瑞穂國中津国、メソポタ

ミアの語義などに照らして、

シュメール、すなわちラテン語でのスメル(皇める)民族のルーツはスメラミコトに通じ、日本の太古の富士山、高天原ではないかと考えます。

神示の方舟と二度目の人間の祖
メソポタミア顕恩郷の南方、エデン河の南岸に橙園郷という一大部落があり、その近年、橙樹は実らずほとんど住民の共食いの惨状。その国の長を橙園王と言う。果樹豊熟する北岸の顕恩郷の神人はすべて蟹面をなせるに引き替え、橙園郷の住民はいづれも猿猴のような容貌であった。南岸の橙園郷の住民が顕恩郷を襲うという出来事はあつた

が、大江の神は、「地広く果実多きこの顕恩郷をして汝ら神人の独占することなく、橙園郷の住民の移住を許し、相ともに天恵



バビロンの空中庭園

の深きを感謝せよ」

大江の神とは顕恩卿の上に安置せる鬼武彦の石神像から現れた神で、大江山の鬼武彦にして今は天教山の野立彦命（国常立尊・国祖良の男神）の命を奉じ、顕恩郷に大江の神と改名して予言警告を与えるために出現した神です。この大江の神は、天教山からメソポタミアに派遣された遠征的冒険隊の一人なのでしょう。

大江神 鬼武彦は橙園山に登

り、部下の神人を使役して真金を掘り出し、鋸・斧その他の金道具を製作しました。橙園郷の果実の突らざる杉、檜、樟等の大木を伐採し、数多の方舟を造ることを教えました。鬼武彦の神像は天の逆鋒となつて、大洪水、大地震の予言をします。その後、大洪水が世界を襲いましたが、顕恩郷の神々は三三三艘の方舟に残らず果物を積み、家畜や草木の種を満載し、五六七日の降雨の中、目無堅間の方舟に乗ってヒマラヤ山へ難を逃れて生き残りました。彼らは二度目の人間の祖となりました。

この郷（顕恩郷）の神人の血統を受け、その容貌を今に髣髴として存しておる人種がある。現代の生物学者や人類学者が、人間は猿の進化したものなりと称ふるも無理なき次第である。ま

た蟹面の神人の子孫もいまに世界の各所に残存し、頭部短く面部平たきいわゆる土蜘蛛人種にその血統を留めている（「神示の方舟」『靈界物語』第五卷二十二章）。地球の中軸なる大地球、すなわち根底の国に落ちて、種々の艱難辛苦をなめた各神人の身魂の時を得て、野立彦の神徳により地中の空洞（天の岩戸）をひらき、天教山の噴火口にむかつて爆発した。天に向かって打ち上げられた数多の星光は、世界の各地にそれぞれ落下した。星光は天授の真靈魂に生まれ変わり、うるわしき神人として身魂相應の神徳を発揮することとなった（「良坤の二霊」『靈界物語』五卷二十六章）。

私は大洪水の発生は、ポールシフトなり地球の地軸の変化・移動に関連があつたのではない

かと思ひます。ノアの方舟発生前の『靈界物語』第五卷第二篇のタイトルは「中軸移動」です。

さて、大洪水後に地上に現れる場所は、アーメニヤ及びコーカス山、エルサレム、メソポタミア及びベルシヤ、印度の一部など、富土地帯の如く高原地帯ばかりとなるはずで、いったん滅びかけた文明はそれら高原地帯から蘇り一斉に広がるはずで。そして、その文明は、すでに前段階の見えない、完成度の高い状態で登場した可能性があります。

ノアの洪水後、地上世界の救済のため、木花姫命の宣示を奉じて、月照彦神、足直彦神、少彦名神、太田神、祝部神、弘子彦神その他の神々は、折から再び廻転してきたる銀橋に打乗り一旦中空を廻りながら、復び野立姫命の現はれたたまへるヒマラヤ山

に無事降下しました。

大和民族はエルサレムから来た出口氏、土地や、風土、気候の具合で、矢張り毛色が変わって来る事もある。それは日本人でも

永いこと西洋人が育ててみな西洋人になってしまふ。食物や風土の関係からしようがないな。

……日本人は土ぐも人種が多いから、洗濯して頭をおさえたよ
うな顔が多い。土ぐも人種とい
うのには蟹みたいな顔の人が多
い。コーカス人がこつちに出て

来たのと——コーカス人種が分
かれて熊襲くまそになって来ている。
熊襲人は髪が一ぱいやがな。

ここら辺り大和民族や。大和
民族というのはパレスチナのエ
ルサレムの方——小亜細亜の方
から来たんやが、鼻下とあごに
髭ひげをはやした人間が多い。この

民族は智謀に富んでいる、人を
統一するのはそういう人種。顔
中に髭をはやしているのは手先
に使われてやる人である」「出
口王仁三郎氏を囲む座談会
(五)『昭和青年』。

公卿達は智謀に富む、そして
静かに温順わたなしい。之は大和民族
の特徴である。熊襲族は所謂いわゆる隼
人とで勇敢であるが乱暴である。
熊襲族は立替に使はるべき種族
であつて、統一は矢張りおとな

しい大和民族でなければ出来ぬ
。「公卿と熊襲」玉鏡』。

神示の方舟に乗つてヒマラヤ
山へ難を逃れて、蟹面をなせる
顕恩郷のシュメールの神人と、
猿猴のような容貌の元橙園郷の

住民たちが生き残り、その一部
が日本民族の一部を形成した。
シュメールに生まれたアブラハ
ムからは、キリスト教、ユダヤ

教、イスラム教の世界宗教が生
まれた……。

シュメールの遺跡からは多く
の人骨が発見されています。
シュメール人の特徴は、目鼻が
大きく、身長はあまり高くなく、
肩幅広く頑丈な骨格、瞳も髪も

黒く、家族主義で一夫一婦制、多
神教で自然への崇拜心が強く、
モンゴロイドにしかできない蒙
古斑があるということ。完全な
遠征的の冒険隊として中津国

の外に派遣された神人の一部が
シュメール人・スマル人と呼ば
れたのではないのでしょうか。

シュメールの地で生まれたア
ブラハムを聖師は、大君おおきみと表現
しています。スメラミコト・天皇

の過去の呼び名は「大王おおきみ」です。
大和民族はエルサレムの方から
来たとされています。

ヒマラヤとスマル山

「顕恩郷の神々は三三三艘の方
舟に残らず果物を積み、家畜や
草木の種を満載し、方舟に乗つ
てヒマラヤ山へ難を逃れて生き
残りました。彼らは二度目の人
間の祖となりました」「音頭と
言霊』神の国』。ここでは、現
生人類の祖先がヒマラヤ山から
出ていることを示しています。

聖書では、「ノア」の三人の息
子のうち、セム（モンゴロイド）
とその家族はノアのもとを離れ
てイスラエルの民として、アブ
ラハムなどを出して、聖書の当
事者になります。ハム族はアフ
リカに追放され、ヤフェト（白
人）は、ノアの箱船がたどり着い
たアララト山のあるトルコ一帯、
コーカサス地方に住み着き、民
族大移動によりヨーロッパへと
広がります（聖師の人種分類と

は異なります)。

ノアの洪水という事がある、ノは水の言霊、アは天の言霊、ノア(水天)は即ち水高しの意であり又水余ると云ふ意味にてノア即ち洪水である(「音頭と言霊」『神の国』)。

「神示の方舟」では、ヒマラヤ山に顕恩郷の神々と元橙園郷の住民が逃れます。ヒマラヤ山から、顕恩郷の神々は最終的に東南アジアや日本へ、元橙園郷の住民は、あるいはアフリカや欧州に流れたのでしょうか。ヒマラヤ山とは霊界物語では後の地球山(「地球山の垂示」『霊界物語』五巻二十八章)。

豊国姫命は野立姫命と変名してヒマラヤ山に現れ、あめのみち天眞道彦命と共に天地の律法を説いた(「地球山の垂示」『霊界物語』五巻二十八章)。



インド・須弥山(カイルス山)

ヒマラヤ山脈は、アジアの山脈で、地球上で最も標高の高い地域です。方舟の漂着したヒマラヤ山こと地球山とはどこか考えてみました。それは当時、インド世界で最も高いと考えられた山と比べてよいでしょう。そして、顕恩郷の神人たちがインド地域で目指すとすれば、スメル山(須弥山)しかないと考えます。当時、外の山々は洪水で水没していたかもしれません。上の写真はヒマラヤにあるカンリン



カイルス山マップ

ポチエ山です。スメル(Sumer)山、カイルス山とも言います。チベット仏教で須弥山(須弥山(サンスクリット Sumer、スメル山)とは古代インドバラムン教、仏教、ジャイナ教等)の世界観の中で中心にそびえる山。仏教の世界観では、須弥山をとりまいて七つの金の山と鉄圍山があり、その間に八つの海がある。これを九山八海と言います。シュメール人のルーツはスメル(Sumer)山にあつたと

岩田明氏は著書で指摘されており、かつて崑崙山脈の西麓にあつたコタン城の真南に位置し、かつて高さは九〇六〇メートルあつたのではないかと伝えられています(『日本超古代文明とシュメール伝説の謎』岩田明)。

大宇宙スメル山を笠にきて

億兆無数の宇宙を踏まむ

惟神スメル山を笠にきて

無数の宇宙を踏破せむとす

(「余白歌」『霊界物語』第一巻)

ノアとナオの方舟、世界統一の神業のお話の一環として、地球上の国家の建設、神示の方舟、日本人のルーツを、『霊界物語』に沿い掘り下げてみました。次号では再び五十首図を使用しながらさらに謎解きを進めようと考えます。

次号へ続く。